

資料紹介

佐伯より長崎桶屋町迄豊後佐伯家中

先觸廻状 竹中馬之丞

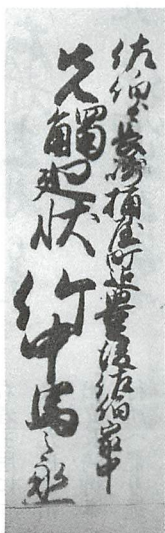
竹中進

(会員 別府市)

〔解説〕

この資料は当家に残されている資料である。

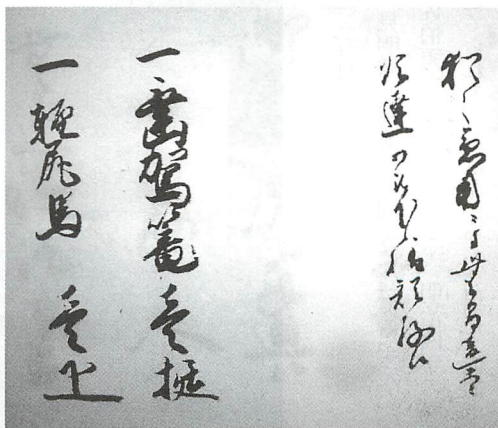
江戸期（嘉永・安政年間の頃）、佐伯より長崎まで旅をする際、事前に先觸役として先行し、それぞれの地の休息所、宿泊所の日程を長崎奉行所に届け出た覚書状である。以下、その先觸廻状を紹介する。



〔読み下し文〕

佐伯より長崎桶屋町まで豊後佐伯家中

先觸廻状 竹中馬之丞

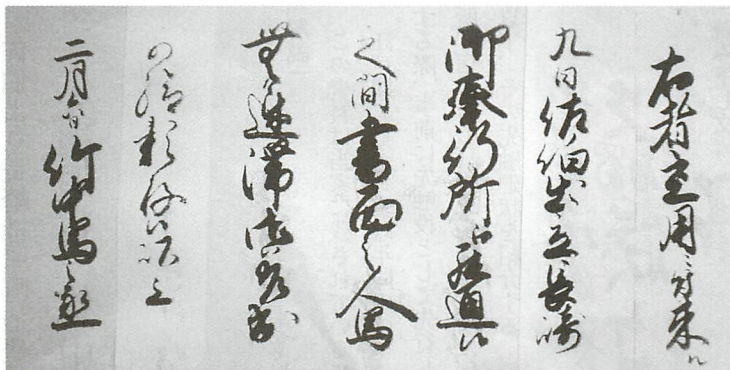


〔読み下し文〕

猶々 急用につき間違ひ無く 早々
順達下さるべき様頼みいり存じ候
一 乗駕籠 壹挺
一 軽尻馬 壹疋

※^{からし}軽尻＝馬利用の形態 荷を付けずに馬に乗る場合と五

貫目まで荷物を運ぶ場合がある。伝馬制。



「読み下し文」

右者主用につき

来る九日佐伯

出立長崎御奉

行所へ罷り通

り候の間、書

面の人馬遅滞

無く御差出給

べく様頼み存

じ存じ候

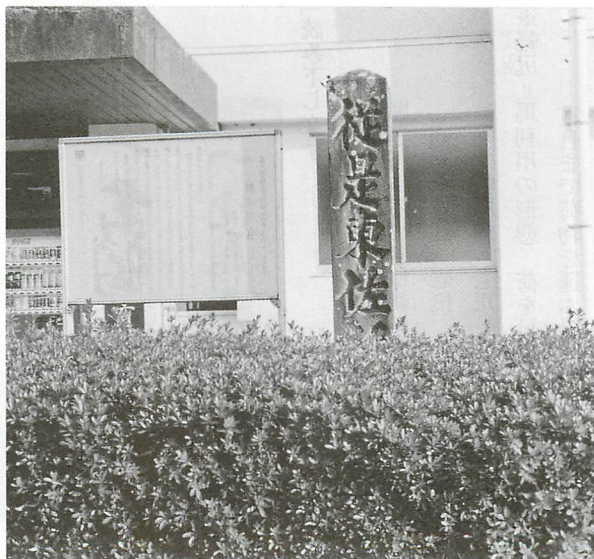
以上

二月六日

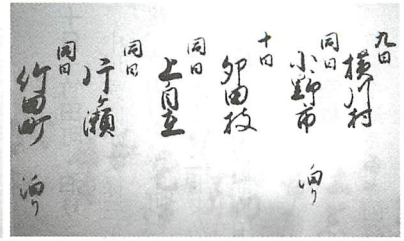
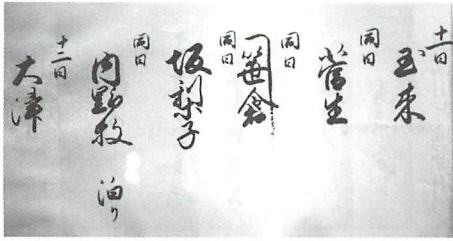
竹中

「解説」(写真)

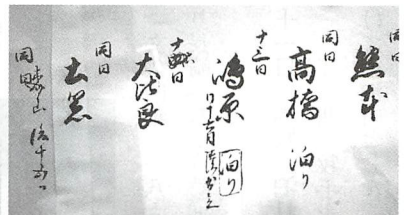
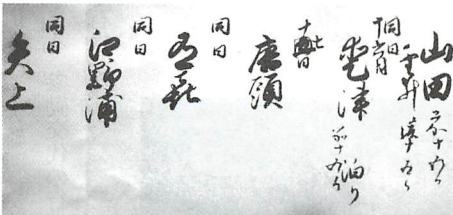
右は、見明峠、岡藩との国境に建てる予定だった石碑。「従是東佐伯領」と書かれている。明治四年の廢藩置県で一度も建てられることはなかった。現在、佐伯市直川の公民館前に立てられ保存されている。



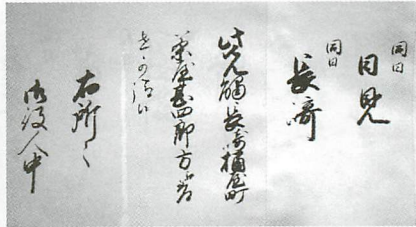
「従是東佐伯領」の碑（直川公民館前）



九日 横川村
 同日 小野市 泊り
 十日 卯田枝 (宇田枝)
 同日 上自在
 同日 片ヶ瀬
 同日 竹田町 泊り
 同日 竹田町 泊り
 十一日 玉来
 同日 菅生
 同日 笹倉
 同日 坂梨子
 同日 内野牧 (内牧) 泊り
 十二日 大津
 同日 熊本
 同日 高橋 泊り
 十三日 島原 泊り
 同十六日 湊出立



十六日 大比良
 同日 土器
 同日 森山 後十五日
 同日 山田 前十五日
 同日 雲井 後十五日
 十六日 愛津泊り前十五日
 十七日 唐願 (唐比)
 同日 有喜
 同日 江野浦
 同日 矢上
 同日 日見
 同日 長崎
 此の先触長崎桶屋町
 茶屋甚四郎へ差
 遣給ふ可候



右所々
御役人中

「解説」

九日 小野市 泊り

古代中世より、日向長井駅から三重駅の中間点で、小野駅がつかれ、特に駅馬が十疋配置された重要地であった

(他の駅は駅馬五疋)。

田代川と越野川の合流点の周りと思われる。

十日 竹田町 泊り

中川秀成が文禄三年(一五九四年)播磨三木より入部後、竹田村を城下町とすべく、村の西方にあり、宿場町として栄えていた玉来から、商家五十三軒を移し、京都を模して築く、小京都竹田の基礎を築き発展した。

滝室坂

笹倉を過ぎると阿蘇東外輪山カルデラ壁に入り、豊後

街道の一大難所にかかる。冬期は柱状の氷柱が頭上にせまる。参勤交代の行列や駅馬の往来でにぎわった。随所に石畳が残る。



笹倉一坂梨子 滝室坂の石畳

文久四年(一八六四年)勝海舟・坂本龍馬も佐賀関より長崎へむかう時通ったと「海舟日記」に記述あり。

十一日 内牧 泊り

江戸期内牧手永会所(註一)が置かれ、御茶屋を設けて宿泊所とした。文化十四年(一八一七年)に温湯が湧

出して内牧温泉として出発したが、規模が小さく

「内牧にも出湯あり、宿町より少し相離れたる所あり」と云う程度だった。

清正公道（堀切道）



清正公道（堀切道）

波野へキ谷より大津までの間、堀切道が盛んに見られる。軍事上、道行く人に地形や周りの様子をさえぎる為の意図がうかがえる。

十二日 高橋泊り 船便にて島原へ

寛永十三年（一六三六年）頃は、高橋川（現坪井川）に米、材木や雜貨物を船に積み、熊本往来に便が良かった。又、島原・天草方面へ結ぶ中心の港でもあった。

助郷役馬三十九、熊本につぐ数値、船宿屋五十戸、旅籠五十戸などあり。

十三日 島原 泊り

江戸期島原半島北目筋経由、南目筋経由の二つの街道として便利な為、公用、私用、商用など広く利用された。しかし、船便を介した事と間道であった為、宿駅設備は余り整っていなかった。普賢岳を見ながら三日間の滞在で英気を養う。

十六日 愛津泊り

土井口番所（註二）があり愛津宿として藩境近くには有明海側と橘湾側の追分にある軒茶店がおかれ、旅人にトコロテン、フタクラ餅・飴など売っていた。二軒茶屋の地名も残る。

日見峠

日見宿は難所を控えて人馬継立の用務が多く、宿役が村民の過重な負担となる。

宿役勤めの人数一四五、馬口付二十、馬二十疋で長崎のすぐ東隣にあつて宿泊客はめつたになかった。西は長崎へは二里で最後の難所であつた。

桶屋町

茶屋甚四郎方着。長崎は正徳五年（一七一五）の奉行所記録「長崎御用留」には、当所は他所と違い専業の旅籠はなく身分に応じて町役人宅や有力商家に宿泊した。今で言う民宿のはしりである。

一般の旅人は知人やつてを頼り、それが無い者は手前の日見、矢上などの宿場に宿泊した。幕末には寺院が宿所にあてられ、同町の向陽山光永寺には明治十三年（一八八〇年）に福沢諭吉も寄寓している。

佐伯より長崎までの八日間の道程である。

春近い季節とは云え、峠や高所の道中は非常に厳しかったと思われる。一日に進む距離には峠や難所が随所にあ

り、昔の旅人は相当な健脚だったと驚かされる。

（註一）手永会所

藩の地方行政区画、惣庄屋・大庄屋など土分の役人が置かれ民政をつかさどる。肥後、小倉、日出、杵築、岡崎の各藩が設けた。

（註二）土井口番所

家の周囲に土の垣をはった番所